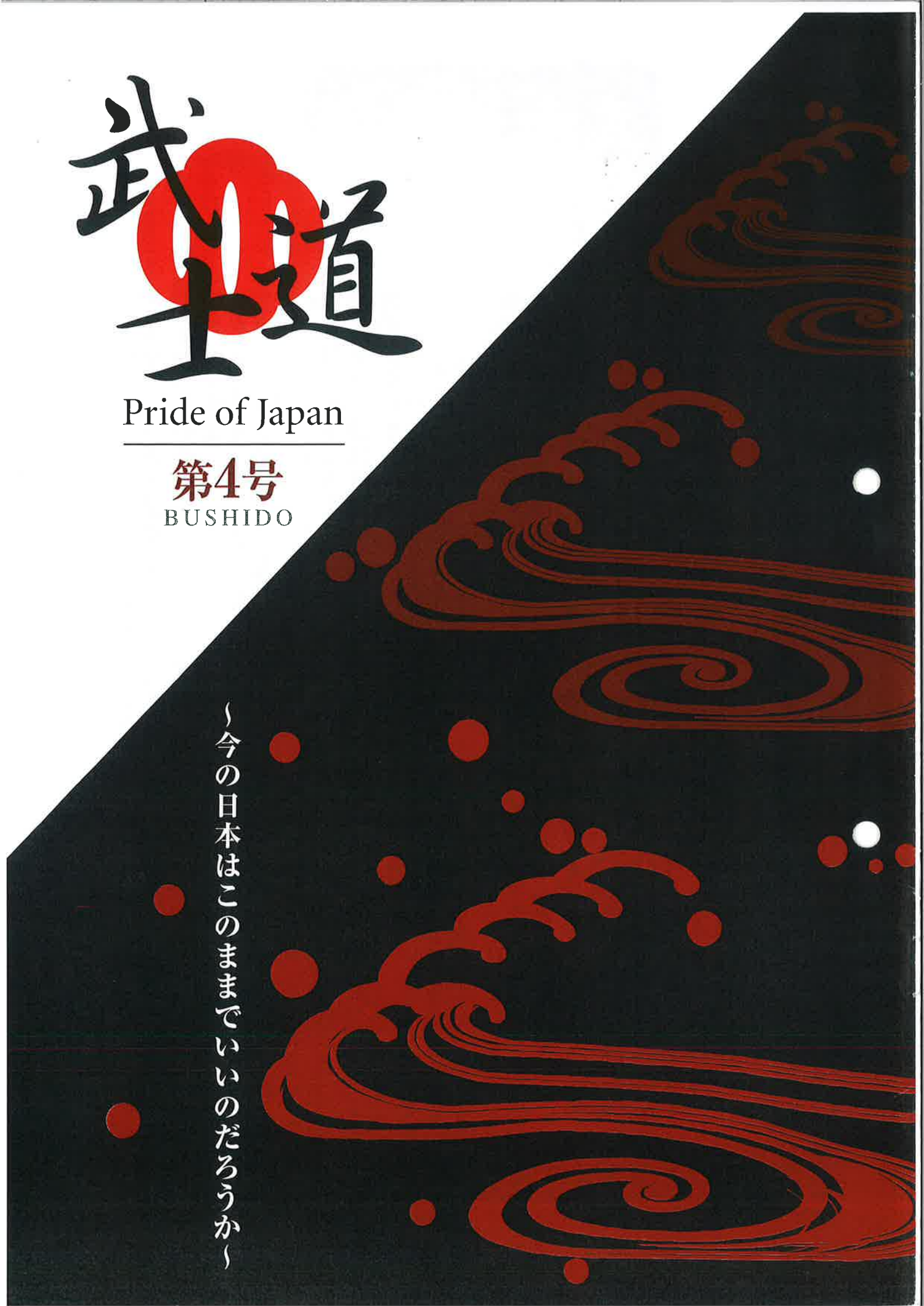


武士道

Pride of Japan

第4号
BUSHIDO

「今の日本はこのままでいいのだろうか」



武士道格言

その2「日新公いろは歌」②

を

小車のわが悪業に
引かれてや 勤むる道を
憂しと見るらん

ちよつとした自分の甘えに引きずられて、心がつい消極的になってしまったというのでしよう。しかし放っておけば、いま勤めている仕事さえも、面白くなく疲れて嫌だと思つていことになりまふ。そこであつてはつけなす。

る

流通すと 貴人や君が
物語り 初めて聞ける
顔も持ちぞよき

既に自分が知っていることでも、目上の人の話は、初めて聞いたような顔つきで聞くことがよいのです。相手の身になつてあげなす。

ぬ

盗人は 余所より入ると
思ふかや 耳目の門に
閉ざしよくせよ

泥棒は、別のところから忍び入つて物を盗んでいくと思つてしようが、そうではありません。泥棒は耳や目から心の中に忍び込み、いつのまにか良心を奪つていくのです。心を大切に用心しましょう。

り

理も法も 立たぬ世ぞとて
引き安き 心の駒の
行くに任すな

ものの道理も法律も役に立たぬ世の中だからといって、好き勝手に、自分の心のおもむくままに行動するのはよくないことだ。

た

種となる 心の水に
任せずば 道より外に
名も流れまじ

自分のやりたいことだからといって、自分の心のおもむくままに行動するといふことさえなければ、人としての行つべき道から外れることはないでしよう。よくよく気をつけましよう。

よ

善き悪しき 人の上にて
身を磨け 友は鏡と
なるものぞかし

他人の言行の良し悪しをみて反省し、自分を磨くことです。特に、友だちというのは、自分を映し出してくれる鏡のようなものと思ひましよう。

か

学問は 朝の潮の
昼間にも 波の夜こそ
なお静かなれ

勉強するには、朝も昼も波のように間断なく修めることですが、夜はなお一層静かで勉強に向いていといえます。

わ

私を 捨てて君にし
向かわねば 恨みも起り
述懐もあり

自己中心の身勝手な考えを捨てて、社会、国家、人類のことを深く考えれば、すべての恨みや不平不満は無くなつてしまつていふ。

「日新公いろは歌」とは「島津家中興の祖」、「日新公(じっしんこう)」と称された、島津 忠良(ただよし) (1492~1568年)が、5年余の歳月をかけ完成させたといふ47首のいろは歌。神道・儒教・仏教の三つの教えを基に、人としての生きる道、特に武士として守らねばならない道を説いたものである。薩摩藩の「郷中(ごじゅう)教育」の基本の精神となつたといわれる。孫にあたる島津義弘も多大な影響を受け、その後も薩摩武士、土道教育の教典となつたこの「日新公いろは歌」は、現代の私たちにも通じる多くの示唆を含んでいます。

解説文引用文献:清水榮一著『島津日新公の教え』(PHP研究所刊)

ふ しゃく しん みよう たん じゃ しん みよう 不惜身命と但惜身命

武士道協会理事 安岡正泰



プロフィール
●(財)郷学研究所 安岡正篤記念館理事長
1931年、東京都生まれ。1956年、早稲田大学第一法学部を卒業
日本通運株式会社入社。1989年、同社取締役(総務、人事、労務部
門担当)に就任。1991年、常務取締役、1993年、常務取締役中
部支店長を経て1995年、退任。関係団体役員を経て、1999年、
財団法人 郷学研究所 安岡正篤記念館理事長に就任、現在に至る。著
書に『為政三部書に学ぶ』(致知出版)など多数。

江戸前期、九州鍋島藩の藩士山本常朝の談話『葉隠聞書』に「武士道と云ふは死ぬ事と見付たり」といつた精神が説かれています。しかし現代

からみれば武士道というとか封建時代の遺物のように考えて、今の世の中にあつては無用の長物、古い道徳であると一方的に否定する人達もいるでしょう。

たしかに昔の武士は忠義のために「いかに死すべきか」ということが、驚くほど強い信念となつて、武士の生き方、武士気質となっていました。

武士道には、神道、儒教、仏教の教えが大きな影響を与えています。その仏教の經典の一つ法華経に「不惜身命」という言葉があります。「身命を惜しまず仏道に励む」という意味です。「武士道と云ふは死ぬ事と見付たり」の談話もこの「不惜身命」と同じだと思えます。真意を熟考してみれば、その基本は「いかに生くべきか」没我になつて生きることも必要であるということでしょう。

徳川光圀が若い子弟に説いた『義公行実』に次

の一文があります

「黄門光圀公卿、諸子弟に諭して曰く、汝曹年少、一旦緩急あらば皆當に勇を奮つて而して首を馬前に隕さんことを思ふべし。然れども危に臨んで死を致すは士の當分なり。血氣の勇は盜賊猶ほ之を善くす。汝曹に望む所以に非ざるなり。士の士たる所以は死の難きに非ず。死に處するを難しと為す。生くべからずして而も生き、死すべからずして而も死す。皆道に非ざるなり。然らば則ち何を以てか之に處せん。聖賢の學を講ずるに在るのみ」

この真意は、不惜身命の故に但惜身命、死の覚悟ができたなら、今度は生きる工夫が大切であることも教えているといえます。

しかしながら江戸時代後半頃から武士に創業時代の気質・気骨がなくなり、とくに幕府の旗本達は享樂的風潮になつてきたのも事実といえます。

徳川時代は日本全国に三百近い藩があつて、そ

れぞれ小日本国をつくっていました。その各藩には優れた名君、家老、学者がおり、また藩校もあつて尚武の武士を育てる人間教育、武士道教育が行われていました。その結果、幕末から明治にかけて地方の若い素朴な田舎侍達によつて明治維新という立派な人道的革命ができたのでしよう。

吉田松陰、西郷南洲、大久保利通、山岡鉄舟、勝海舟のような人物達がいたからこそともいえます。おそらくこういふ武士道精神に磨かれた人物がいなければ、將軍慶喜をはじめ諸大名の多くは殺されていたかもしれません。

今の日本は残念ながら倫理道徳の希薄化、公共精神の欠如、社会規範の崩壊が進んでいます。日本人の心の再生のためには、武士道という日本のよき伝統・精神を学び直し信念気節をもった人づくり、そして歴史的、精神的エネルギーを呼び戻すことが喫緊の課題といえましよう。

この時期、武士道協会の活動は、まことに意義深いものがあると思えます。



武士道対談

平成二一年四月七日、石塚彰東京大学拳法会（OB会）会長と本多百代武士道協会常務理事兼事務局長との武道（空手）を通じての武士道の在り方について、対談が行われました。

本多 本日は大変、お忙しい中、私ども武士道協会のためにお時間をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。空手という武道を嗜んだ方との対談ははじめてですが宜しくお願います。なお、私事ですが父も空手を学んだことがあり、これも何かの縁と思っております。私は武士道の目的について、心を大事にする側隠の情等、お年寄りや体の弱い人達も安心して過ごせる世の中を作っていくことと考えておりますが、石塚さんは武士道を、どのようにつけておられるでしょうか。

石塚 日本に於ける武とは、現在、柔・剣・弓道や空手等が挙げられます。武そのものには本来、戈（こ）を止める意味があるといわれていますが、これに道というものを付けますと大変、解釈が難しい世界に入ってしまうのではないでし

ようか。

以前、空手は武道であるか、スポーツであるかを学生連盟の会誌に書いたことがあります。武道とはもともと争いに勝つための手段でありこれを学ぶ方法であると考えておりました。ただ、道という概念が強くなると生命の賭けだけでは済まなくなる何かがあると思います。一方、スポーツは多くのルールがありその中で技を競うわけですが、武道の深遠さと比べて、やや気楽という面は否定できないでしょう。しかし、スポーツも人間としての社会性の育成が重要な要素となっていることから考えると、武道とスポーツを相反させて考えることには余り意味がないと述べたことがあります。

本多 何事にも道が付くと難しくなりますね。武だけであれば「術」であると単純に受け入れ易いですね。私は武道という場合、石塚さんのおっしゃるそもそも命の取りあいであるという反面、「大切なものを守る」ということが含まれていると思います。

石塚 武道の定義としては本多さんの今の言葉は非常に良いですね。先程、スポーツ論を私は述べましたが、スポーツといった場合、よくアマチュアリズムが論じられています。これは普通の人が、一人前として世に認められた生活を送り、その上でスポーツに勤しんでいることを指しますが、そこに重要な意味が含ま

れていると考えます。世の中の健全性にはアマチュアリズム（精神）と密接な関係があると思うからです。

これも結論のようになりませんが、「武道とは治国平天下の道」につながるということも行きつくこととなりましょう。武道は高い倫理観、目的観を本来持っており、このことが今の言葉を補完するかと思えます

本多 私は「大和心（魂）」という言葉を使っています。かつて日本人は皆が共有しそれに則って生きるという源、ルーツのようなものがありました。現代では日本人本来の心が希薄化し、そこには殺伐としたものしか残っていないのではないかと思っています。

武士道も戦国から江戸時代へ、時代の流れによつて変遷していますが、新渡戸稲造による武士道が一般的に支持されています。ただ、私共が目指している大きな目的を考えますと武士道に拘る必要はなく、例えば道徳協会と名乗っても構わないと思っております。

石塚 武士道を歴史的にみれば戦国時代では人を欺くことや約束の反故、権謀術策等は当たり前であったわけですが、生きていくためには必要悪であったことでしよう。これを武士道とみるかどうかは別にして武士にはこんなこと



もあつたという事実も認識しておく必要がありましょう。

本多さんが悩める現代を武士道という切り口で考えるということは、大変面白いことだと思えます。私からの質問ですが、武士道を追及していく中で本多さん自身が気付いたこと等聞きたいですね。

本多 私の本業は企業の人材育成のコンサルタントであり、研修を通じて、若い年代の人達とお付き合いが多くなっています。そうした若い人達を指導するとき、研修マニュアル・スキルだけですと私自身、壁に突き当たったことが何度となくありました。そのとき、心を大切にする武士道の精神で受講生に接したところ、大変研修の効果があつたので、今は研修に武士道を取り入れています。

石塚さんは、政府系団体機関でご活躍なされたと伺っておりますが、組織の在り方や部下・人材育成等での留意点をどのように心がけておられたのでしょうか。

石塚 私はいつも、キーワードとしてコミュニケーション即ち「常識」という言葉を底辺においています。一方、戦後復興の日が



浅い時代でしたので、科学的管理法としてヒューマンリレーションが企業で盛んに登用されておりました。私はどちらが良いということではなく、組み合わせが重要であるとき、思っております。

どちらにも共通することは「人間の常識論」が極めて大切であるということです。常識とは健全な社会生活を送る上で欠かすことができないものであり、企業・組織内部でも大事な要素です。

卑近な例ですが当時、深夜のタクシー乗り場では我先を争う人々がおり、みっともない事態を、多く目にしました。「武人」は恐らく泰然とした行動をとるだろうし、皆さんに常識が備わっていれば無益な混乱は起きないだろうと思つたものです。

もう一つ、部下を育てるということですが、部下がよい仕事をするときそれらを自分がやったように言う上司がいます。これは大変な間違いです。部下の成果を部下の手柄として報告することは、結果的に自分の評価があがることになるのが分らないのでしょうか。このことは強い指導者たる黒帯が増えればと部全体の評価、合わせて指導者の評価もあがるという空手の世界にも通じることなのです。

本多 石塚さんご自身の人間・人格形成に影響を及ぼしたのは、いつ頃のことと思われれますか。石塚 いろいろありますね。家庭や両親、兄の影

響もあります。やはり大人に成りかけた大学に入ってからの先輩達のもの考え方等から相当影響を受けたと思っております。同時に同期連中からも多くを得ましたね。

本多 常識が世の中に余りにも欠けているというか、普通のことの普通になつていないことに、石塚さんのコミュニケーションの重要性を考えてまいります。家庭、社会等の健全性が規範となれば、常識ある普通の人をもっと多くなるでしょう。以前と今では余りにも乖離した社会の何処から切り口というか、メスを入れればよいのか。私は武士道がこれに応えることができるのではないかと考えているのですが。

石塚 武士道が一つの切っ掛けになることはその通りと思いますが、気を付けなければならぬのは解決策は武士道だけではないということです。宗教的なものにも当然ありますし、その他にもあり得ましょう。それぞれの切り口で事態を真摯に検討し、総合的に取り組んでいくことが肝要なのではないでしょうか。



石塚彰氏要歴

1931年生まれ。1953年東大経済卒。政府系団体機関の要職を歴任。現東大拳法会会長、空手八段、和道流創始者大塚博紀師範の直弟子。



武士道を伝えるということ

武士道協会 理事 久保井規文



●プロフィール
全日本教職員連盟委員長
1959年、栃木県生まれ。栃木県公立学校教員として宇都宮市等の小学校に勤務。
2007年度に「美しい日本人の心の育成」を掲げる教職員の全国組織である全日本教職員連盟(全日教連)の本部事務局に入る。事務局長を経て、2009年度から委員長に就任。日本教育文化研究所理事長。

ある小学校に異動した時のことである。最初に担任したのは六年生の学級だった。その学級は、一部の子供が騒ぐとそれに呼応するように騒ぎが広がったり、些細なことが原因で喧嘩が始まったりするような状態であった。毎朝設けられた僅か十五分間の読書の時間でさえ、取り組むことができない有様だった。

新学期が始まり一カ月程経った頃、学級で一番の暴れん坊の男子が熱心に本を読んでいる姿を目にした。彼が手にしていたのは、漫画で描かれた「徳川家康」であった。私が感想を聞くと彼は、「この人のことを初めて知ったけど、なかなか面白いよ」と話してくれた。そこで図書室担当の先生にお願いして、偉人や有名人に關する本を、教室に置かせてもらうことにした。その中には、野球のイチロー選手や、サッカーの中村俊輔選手について書かれたものもあった。すると、読書の時間に徐々に変化が表れてきたのだ。座席に着いて静かに本を読むようになったのであった。それに伴って、学級全体が

少しずつ落ち着きを取り戻し、授業にも前向きな姿勢が見えるようになっていった。

脳科学者、茂木健一郎氏は「他人[※]の心の状態を読み取る、前頭葉を中心とした『ミラーシステム』の働きにより、人から人へと感情は簡単に伝わっていく」と述べている。優れた人物の生き方を知ること、子供たちの感情や考え方に多少なりとも影響が与えられ、学級全体が変わる契機になったのかもしれない。

一つの道を極めた人間には、国内外を問わず、必ず武士道の精神が見て取れる。武士道とは、長い年月をかけて、多くの武士たちの思想や行動の総和として形作られたものであり、まさにミラーシステムによって、代々伝わってきたものと言えよう。そう考えると、子供たちに生きる上での羅針盤となるような人間の生き方を提示することの重要性が理解できる。

規範意識や公共心が希薄になったと言われる久しい。子供は大人の背中を見て育つのであるから、私たち大人の生き方を見直すことから始

めなければならぬのは至極当然なことである。その指針の一つとなるのが武士道の精神である。武士道を意識して日々の生活を送る大人の姿勢が、子供に影響を与えないはずはない。

新しい学習指導要領には、伝統や文化に関する教育や道徳教育の充実が盛り込まれた。武士道の精神は、そのどちらにも関わるものとして、子供たちに伝えて行くことが大切なのだ。

※茂木健一郎著「脳の中の人生」中央公論新社



天皇陛下御即位二十年奉祝

財団法人日本武道館 『日本武道祭』
開館四十五周年記念

武士道協会常務理事・事務局長 本多百代



プロフィール
●(有)LineAge(ラインエイジ)代表取締役
武士道を取り入れた人材育成・社員教育を提案実施。講
演講師、社員研修講師、就活セミナー講師、大学ゲスト
講師などを務める。中日新聞社の中日研修センターで、組
織開発と人材育成にたずさわる。また、組織を活性化させる
方法をみつけるため、自ら「社員教育種」パートナーとして働
き、社員の意欲について研究を重ね、武士道による育成方
法を見つけた。著書に「これで完璧人材育成白書」がある。

私たちが学生時代は体育の日と言えば十月十日
だった。日本武道館で日本武道祭が開催され、
『武道』平成二十一年二月号に私の随筆が掲載さ
れたことから、光栄にもお招きを受けた。秋篠宮
両殿下をお迎えしての演武は静寂さの中に緊張感
の漂う清々しいものであった。

開会式で出場者たちがそれぞれの道着や武具を
着装して整列する姿は、凛とした美しさがあった。
日本人として誇りに思う姿だ。さすが黒帯は起立
の姿勢に糸の乱れも無い。しかし、白帯の子供
達に静止の姿はなく、絶えず体の一部に無用の動
きがあった。黒帯級の姿は訓練の賜物であろう。
高潔な精神で隙が無く凛々しく、且つ柔和で穏や
かな雰囲気がある。一人の人間の中で陰陽のバラ
ンスが取れている美しい姿だ。人間を成長させる
にはある程度厳しく型にはめる時期が必要である
ことを証明しているかのようであった。

日本武道祭開始直前に、武道は静寂の中で行わ
れる旨の館内アナウンスがあった。弓道では片肌
を脱ぎ、張り詰める空気の中で的を目掛けて矢を
射る。バシッという音と共に的に刺さる矢。緊張

の中でも平常心を失わず、意識を集中する。命を
かけた瞬間の美しさだ。

合気道の創設者、植芝盛平翁は神様と呼ばれる
に相応しい人だったと聞いた。どこにも気負うと
ころがなく自然体で動きに無理がない。相手の力
を利用して倒す姿が印象的だった。人間は他者の
力を拝借して生きることでも必要で、だからこそ総
てのことに感謝をする謙虚さが必要な所以である
ことを改めて感じた。勝ってもガッツポーズをせ
ず、相手に敬礼をして感謝の意を表明する日本人
の生き方が良く理解できる。命をかけあつたから
こそ、勝って嬉しいという感覚は生まれず、勝つ
たからこそ対戦相手に敬意を表する謙虚さから生
まれる礼の心こそ、武道に精通し
た人の在り方ではないだろうか。

宇宙万物は全てが陰陽のバラ
ンスで成り立っている。武道が陽な
らば武士道は陰である。江戸時代
は日々武道の鍛錬と同時に武士道
である「大学」を藩校や寺子屋で
学んだ。文武共に勤しむことで



(日本武道祭)

「規則を守る」「人を慈しむ」「誠意をもって生き
る」など、人々が共生共存して社会生活を送るに
必要なことが自然と身に付く。学術的人間的に優
れた人格者となるには、まずは規則を守ることか
ら身につけ、知恵を出して、誠実な人間になるこ
とで、身が修まる、そうすれば家が齋い、国を治
められるようになるということを、「大学」の教
えの中で自然と身につけていった。規則を守る
ようにするには、型にはめてでも意識を高める時
期が必要なのだ。記憶力を高めることを中心にし
た現代の教育で、人格者を育てるには無理がある
ように感じるのには私だけだろうか？ 陰陽のバラ
ンスを欠いた現代、アラスカのように一日中、陽
が差していれば一つ四十五kgものキャベツが出来
るように、無用の長物が氾濫し、必要なものが不
足しているように思う。素晴らしい日本武道祭を
拝見しながら、武士道協会は今の時代こそ必要
不可欠の存在であると新たに意欲が湧いた一日
であった。



わが身に引き受ける （武士道と共に生きる）

武士道協会 理事
かぎやま ひでさぶろう
鍵山秀三郎



武士道とは、人として恥ずかしくない生き方をする事です。悪いことはしないというだけでは、武士道とは言えません。恥ずかしくない生き方とは、人に迷惑をかけない、人が不愉快に思うことはしない、人の幸せを壊さない、人の気持ち

を考える、という強い信念を持つことがとても大切なのです。そこには仕返し、つまり仕打ちをして返すということも恥ずかしい行為に入るといっても意識しておく必要があります。

世の中にはせっかくな積み重ねてきた努力や苦勞を平気で無駄にする人が多くいます。少しばかり功成り名をとげると、つい傲慢になり初心を忘れがちです。初心を忘れた人は、かつて自分が受けた仕打ちをそのまま人にかえしてしまうことがよくあります。

自分が努力の過程で受けた仕打ちを人にしてしまえば、仕打ちを受けた人の心は荒みます。さらに、その人は憂さを晴らすという形でまた別の人に仕返しをします。心の荒みはどんどん伝播し、広がり、世の中まで荒むようになります。

世の中を荒ませないためには、自分が体験してきた辛い思いを、自分自身で消化できる人間になることです。

人に押されたら押し返すのではなく、押されっぱなしで自分のなかにおさめていく。周囲に決して伝播させない。

一人ひとりがわが身に引き受けていけば、世の中は必ずよくなります。仕返しをしているようでは、せっかくなの体験が無駄になるばかりです。もちろん、怒りや悔しさをバネにして努力することも大事なことです。しかし、度が過ぎると人間の卑しさ、醜さにつながるから

気をつけなければいけません。

たとえ仕打ちを受けたとしても、

それは自分の心を強くするため必要だったと捉え、わが身に引き受け伝播を食い止めようとする「武士道」を貫く強い人になっていただきたいと思えます。

●プロフィール

(株) イエローハット取締役相談役

1933年、東京生まれ。1952年、疎開先の岐阜県立東濃高校卒業。1953年、デトロイト商会入社。1961年、ローヤルを創業し社長に就任。1997年、社名をイエローハットに変更。1998年、同社取締役相談役となる。創業以来続けている「掃除」に多くの人が共鳴し、近年は掃除運動が内外に広がっている。

「日本を美しくする会」相談役。

著書に『凡事徹底』『鍵山秀三郎語録』『小さな実践の一步から』など多数。



『武道初心集』のいきさつについて

武士道協会 会員 大道寺弘義

校訂者古川哲史による『武道初心集』の初版が、岩波書店から出版されたのは、昭和十八年十一月二十五日で二万部発行され、七版としてのリクエスト復刊は、平成二十年八月のことである。

五十六カ条ある写本と天保五年信州松代で刊行されたものを底本とした校訂本になっている。幕末の越前福井藩主松平慶永公が、上・下二巻を天保十四年に携えており、『武道初心集』を感じている者として、これを家中の人に愛読するように勧めているが、反応がなかったようである。

世間に流布されたのは原本の写本ではなく、五十六カ条を削減して四十四カ条にまとめたのが、天保五年十一月、江戸の書林・芝神明「和泉屋吉兵衛」の手によって成版された。「大道寺友山」が逝去してから約百年後の版になったものである。しかし和泉屋版は、その木版本に松代藩因田氏藏彫としてあり、同藩の小林徳方という署名の跋を書いているように、実に松代藩において刊行されたものであった。こうして藩のほとんどの家庭で武士訓として愛用された。写本百年間は、原

本の写本によって伝えられていたが、松代藩の手になってからは重要文献となって流布されるようになった。

大道寺孫九朗重祐(友山)の出自であるが、先祖は山城国綴喜郡宇治田原の立川に大道寺地区があり、その地名を姓にした。司馬遼太郎の『箱根の城』に登場する大道寺太郎という人物がその地区から出ており、後に後北条氏五代の基を開いた北条早雲に従って仲間数人と東国へ下ることになり、「大道寺」の歴史はここに始まる。その後、北条氏の重臣として仕えるようになった。特に、NHKの大河ドラマ「天地人」では、豊臣秀吉の小田原攻めの関係で、当時、友山の曾祖父大道寺政繁は松井田城主であり、秀吉の手者により江戸桜田で斬殺された。祖父の道繁は京都で横死に合い、父の繁久は、徳川秀忠の命によって越後国高田城主松平忠輝に仕えるも、間もなく忠輝が左遷にあつたので繁久は浪人し越後で没した。

「友山」は、越後国村上邑で生まれ、若年の頃、武州に出て北条流の祖でもある北条氏長に伝え、兵学を山鹿高祐らに学んだ。そのような拔群な環境の中で、友山は兵学者として自由に諸侯に講義に出かけた。

◎「友山」の作品『靈敵夜話』をインターネットに掲載しております。ご一読賜れば幸甚に存じます。

<http://www.infoamonline.jp/~rabbai/index.html>

(新潟市在住)



●「大道寺友山 その人間像と教育思想」(写真左側)

大道寺弘義氏は、平成十二年十二月に『大道寺友山 その人間像と教育思想』を自費出版されている。祖先、大道寺友山の足跡を追いながら、『武道初心集』を紐解き、現代の時代にも対応した内容となっている。大道寺友山の著書を収蔵している図書館・機関にて拝読されたい。

大道寺弘義 編著

その人間像と教育思想



(武士道協会事務局)

特別寄稿

『日本の医学思想から 武士道を考える』

武士道協会 会員

有川量崇 ありかわ かずむね

我が国における医学思想を追っていくことは、日本人の思想史を考察するにあたり大変参考になるものと考えられる。我が国の医学思想はどのように発展したのか分析し、武士道と医学を考えてみたい。

古代日本の医療を知る手がかりは古事記や日本書紀にあり、日本人の根底にある病理観を記している。外邪が体内に入ると病気になるという原理のもとにこの時代は動いている。例えば、疫病は神の意志に支配されて音もなく集落を訪れ、集落の民を次々に同じ病に感染させてしまうと考えられていた。つまり疫病を自由に流行させる神が存在し、その神の崇とみていた。そこで神に善行を尽くしたものは、その目印に神秘的な威力を持つ茅の輪が与えられ、それで疫病が避けて通ると信じられていた。「古事記」によれば、崇神天皇の時代、疫病の流行で多くの人々が亡くなり、それを天皇は嘆き、神を祀ってやすまれると、オオモノヌシ(大物主神)の大神が夢枕に立ち、「この病気が流行するのは自分の心である。オオタタネコを以て、自分を祀らせれば疫病は治まるだろう。」と告げた。そこでオオタタネコを探し求め、つれて来て、オオモノヌシを祀らせたところ、流行していた疫病が終息したと記されている。この頃は、疫病を流行

させる神は、罪を犯したものに病を引き起こすほか、神が自らの荒ぶる心のままに行動して、疫病を起こすと考えられていたと窺える。日本書記においても、人々は荒魂の神が安らぐように鎮魂祭を行い、家内安全、五穀豊穡を祈ったと記載されており、この頃は、薬物も使用されているが、呪術が主に医療として用いられていたことが分かる。このように、医療史の側面から古書をよむと、古代日本において、病氣予防のためには自然災害と同様、神々が荒れないように祀ることが大切であると考えられていたことが把握でき、古代日本人は神々への信仰が大変深かったことが理解できる。

隋、唐との交流から大化の改新が行われ、大宝律令が編集された。その後、西暦七一八年に我が国最古の医事制度が記してある「いしちやう医疾令」が編集されている。唐の律令は、儒教の仁愛と法家の説く現実主義を基本に作られたものであるために、不治の病を持つ者や高齢者に、特別の保護や恩典を与えることを明文化しているが、この医疾令は唐の律令以上に有症者への保護が厚い面がある。これは、為政者が仏教を深く信じ、仏教の慈悲の精神を儒教の仁愛の精神に合致させ、より理想的な形を求めて諸制度を定めた結果であろう。この頃から日本人は医療技術だけでなく、医療思想面に関しても多くの思想を融合させ、最も優れたモノを作る能力にたけている。

西暦九八二年に円融天皇より編集の勅を受け、西暦九八四年に丹波康頼によって完成された「いしんぽう医心方」が、原本の姿を今にそのまま伝える日本で最古の医書である。これには医の倫理が最初の項に記載されており、様々の思想の融合により、この当時として最高の医の倫理を唱えていることがうかがえる。

江戸時代西暦一七一三年、貝原益軒が「養生訓」を発行した。その中に「いし医は仁術である。仁愛の心を本とし、人を救うのを志とすべき

である。自分の利益ばかりを考えてはいけない」とある。また、「君子医は人のためにする。人を救うことだけが志である。一方、小人医は自分のためにする。自分の利益だけを志し、人を救うことだけに志すことがない」「病気の貴賤、貧富のへだてなく、心をつくして病気をなおすべきである」と記している。これは「医は仁術である」という医学思想を凝縮させた一文であり、この医学思想が現在の日本医学思想にも生きていなければならないものであると考える。

この時代になると西洋から蘭学の情報が入ってくるようになり、西暦一七七四年杉田玄白らによって「解体新書」の翻訳刊行が行われた。これは西洋医学を従来我が国で行われていた医学に取り入れるためには、極めて画期的な事象であった。杉田は「医の業を立てようとおもうものは、第一に恥を知る心を失わず、ちよつとしたあいだも油断せず、一人でも、たのまれた患者があれば、自分の妻か子がわずらっているような気持ちで、深く考えをめぐらし、親切に治療してやらねばならぬ」と医療を志すものに説教しており、医は仁術であるという医学思想を示している。また、杉田は、当時ロシアとの通商外交問題に関する件に対し「現在の武士たちの軟弱さや、すたれた武士道ではロシアに勝てるわけではない」と述べており、武士道の側面から外交を評価している。

明治維新後、先人達は必死に海外から医学を学び、我が国の医学は発展、数十年で野口英世や北里柴三郎など世界の医学者の第一人者を生むようになつた。

その後、大東亜戦争が勃発し、私の親戚は南太平洋の激戦地ソロモン諸島ブーゲンビル島にて一九四三年八月から終戦まで二年間軍医として従軍した。約三万人が出征し、生き残ったのは三千人だったという。彼は、日本本土とソロモンの連絡が途絶え、雑草を食し

木の根をかじり辛うじて露命をつなぐ程に食糧に困窮している状況の中でも、日本軍だけでなく原住民に対しても真心をもって医療を施し、原住民からも信頼関係を築いていた。そして終戦後、ブーゲンビル島の原住民の医療状態や食生活について論文を書いているが、その論文の序の原住民への配慮の言葉があり、軍医であり医学者であり、そして武士道を貫き通したのではないかと思う。彼が生きていた頃、私に「武士道と医道は同じである」とお話になっていたことを思い出す。

二〇〇一年九月一日、世界中が震撼した同時多発テロが起きた時、私は米国コロンビア大学に留学中でNYに在住であった。宗教の議論は毎晩続いた。新渡戸稲造もベルギーの法学者から日本の学校には宗教教育がないとすればいっただうして道徳教育を受けられるのか、と問われたことがきっかけで武士道を書いたと序に記載されているが、私も同じく「日本には武士道が……」という説明をした。世界に出る際は、武士道を少なくとも理解していくことは重要である。

現在、我が国は世界一の長寿国となっている。これは先人方の医学思想からくるものでもあり、君に忠、親に孝、自らを節すること厳しく、下位の者に仁慈を以てし、敵には憐れみをかけ、私欲を忌み、公正を尊び、富貴よりも名誉を以て貴しとなす、という武士道精神が国づくりの頃から医療の根底に続いていたが要因の一つであると考えられる。

最後に、医学・医療の場で崇高な武士道精神をより多く発揮し、世界一安心して暮らせる最高な国家にするためにも、若者の武士道精神の習得が望まれ、武士道協会にはその教育事業にも期待する。

(日本大学松戸歯学部 専任講師)

武士道サークル設立にあたって

今若者に必要な武士道精神

加藤駿吾

「武士道」と聞いて多くの若者は、何か堅苦しいイメージを持っているのではないかと思えます。何か自分たちとは縁があまりないような存在。実際、僕もつい最近まで武士道に対して、あまり意識したこともなかったのですが、はるか遠くにあるような存在だと感じていました。

僕が武士道を学び、そして広めようとしたきっかけは今年の春休み、初めて海外に行ったことにあります。

一カ月ほど、アメリカのボストンに語学留学に向かったのですが、生まれて初めて海外に出て、外から日本を眺めて見たとき、何かとてつもない違和感を覚えました。語学学校には、たくさんさんの国から留学生が来ていたので、大雑把ではありますが、世界の縮図だと思って観察していました。特に、日本人の若者を深く観察したところ、そこにいたのは真面目で、妙にプライドだけ高いが、基本的に自分のことばかり考えている人たちでした。

個性は主張するが、集団から抜けることが恥だと思ひ、思い切った行動ができないで、結局つるんでいる、度胸のない人たち。昔の日本人は、こうではなかったはずなのに……。

なぜこのような日本人が生まれたのか、ひたすら考えました。そして、考え抜いた末の結論が、現代日本人は先祖から継承すべきものを継承していないということでした。

日本の伝統的な精神、歴史観、文化。日本を支え続けてきたもつとも大事なものが、年を追うごとに消え失せていきます。そして、日本の未来に対して、強い危機感を覚えました。

何か少しでも日本のために、学生の自分にかできないことはないかと思ひ、思いついたのが「武士道サークル」を創ることです。自分自身も含め、たくさんさんの若者が志を立て、武士道精神に則って、活躍できればと思ひました。

帰国後、武士道協会の方々との出会いがあり、この秋から、友達の肥後君と共に活動を始めるに至りました。平成二十一年十一月、京都大学十一月祭において、武士道サークル「立志会」発足記念講演を開催したところであります。

何よりも実践を第一に活動し、これから活動の輪を広げていきたいと思ひます。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

(京都大学 学生)



武士道精神継承の必要性

関口忠相

今年、横浜港が開港して百五十年、つまり日本人が世界に乗り出してから一世紀半の月日が流れたということになります。

私の先祖であるシーボルトは同じく江戸末期にこの日本、長崎の地に降り立ちたちまち日本の文化の虜となり、その研究活動を始めました。その収集品はシーボルトの二回の渡航（シーボルト事件後、幕末期にシーボルトは幕府の外交顧問として長男アレキサンデルと共に再来日をします）、後に兄と来日をするハインリッヒの収集品と合わせて数千点を数え、今でもヨーロッパ各地の博物館には当時のシーボルトが収集した数多くのシーボルトコレクションが収蔵されています。

当時の日本でも他にもシーボルトを驚かせたのが日本人の教育水準の高さでした。シーボルトは来日後、長崎の鳴滝に医学の私塾を開きましたが、日本人の弟子達の手先の器用さと勤勉さに感心し、幾人かの高弟たちをヨーロッパでも通用するだろうと賞賛しました。また、アレキサンデルとハインリッヒのシーボルト兄弟は、明治の新時代を迎え欧州列強と対抗すべく努力をする日本人の手助けをする中で、その高い教養に感心し、時に感嘆の声すらも漏らすのでした。アレキサンデルが通

訳として同行した欧州への使節団も各地で絶賛の声を浴びます。彼らの凜とした立ち居振舞いは、欧州人にとってただの東方の小国であったはずの日本に憧れと尊敬の念を抱かせるキッカケとなります。

その後、日本が急速に発展をし、遂には日露戦争の勝利をもって欧州列強に肩を並べるような国となったのはご存知の通りですが、その奇跡の大躍進を支えたのはやはり日本人の持つ教養の高さ、勤勉さであることは言うまでもありません。

日本人の教育水準の高さは江戸時代よりの寺子屋、藩校、私塾が融合をしていく中で作られていった優れた教育制度はもちろんです。ただ知識があるだけでは尊敬の対象にはなりません。やはり、明治初期に欧米人の羨望を集めたのは世界屈指の教育システム、藩校藩学によって蓄積された武士道精神というものの素晴らしさではないでしょうか。

それから百年以上の時が経ち今、日本は先進国ではあるものの、その礎となった武士道精神は失われつつあります。国家を愛する心、日本人としての誇りすらも薄れ、世界から尊敬される国家となれているかと言われればそれには大きな疑問符が付きます。それではいくら経済的に豊かになろうとも、未来は明るいものではありません。資源も乏しく、軍事力も持たないこの日本がこれから生き残って行くには、今一度襟を正し、世界に尊敬される国を目指さなくてはならないのです。

その復興のひとつの大切な要素となるのは、やはり世界の歴史に稀に見る大改革である明治維新を成し遂げ、その後の大躍進を支えた武士道精神を根底に持つ教育の再生に他ならないでしょう。世界が混迷を深める今、日本はまさに改革の岐路に立っているのです。

この改革は容易なものではありません。明治維新以上の難易度の中、何年何十年もの月日を要するものになるでしょう。勿論一つの世代での達成は叶うものではなく、次世代に継承をしていく必要があります。

日本の未来にとって、何が必要か？ 今、その実現の為に自分達が何をすべきか？

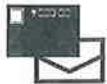
私は若者が当たり前に国を愛し、誇りを持ち、熱く国家の将来を語り合うことこそが日本再生の唯一無二の方法だと信じています。その中で、武士道精神こそが日本を救うと信じ、また会員の方々には次世代への武士道精神の継承も重要な武士道協会の使命であるとしてご理解を頂き、ご協力を賜れますようお願い申し上げます。

(若者が未来を変ええる会会長)

その一歩として、武士道協会では年末の二二月二〇日より二二日まで武士道学校が開校されます。三日間三〇代までの若者が共に過ごし、一つの大きなテーマの下(今年「教育」日本にとって必要な教育とは何か?)がテーマです)に学び、議論をし、その研究発表は「武士道・若者宣言」としてまとめられ、翌二三日の武士道協会記念シンポジウムで発表、その後正式な提言として文部科学省へと提出致します。

(武士道協会事務局)

会員さまからのお便り



若者に思う

会員 三島 康典

去る土曜日、小雨模様の中、駅へと向かいました。歩道が非常に狭くなっている通路に差し掛かったところ、女子高生の集団と遭遇しました。対面する通行人が来ても全く避けようともせず、声高に話しながら歩いて来ました。私はガードレールに身を寄せ、彼女達の通り過ぎるのを待ちました。皆が夫々に手に肩に大きなバッグを持っており、通行している他の人達に当たったりしておりましたが、全く素知らぬ顔であり、待っている私にも、四、五人のバッグが当たりましたが一瞥だにせず通り過ぎました。腹に据えかねた私は、殿を務めている二人に「君達、私はこうやって待っていたのだ、一言何かあってもいいじゃないのかな」と言ったところ、驚くべき罵詈雑言が返って来ました。あまつさえ一人の生徒に至っては「殺すぞ」と大声で喚き去って行きました。私は腹立ちを通り越して、悲しくなって彼女達の後姿を見送りました。彼女達は一人二人であったなら、恐らくそのような言葉は口にしないでしょうが、多分群集心理が働いたのではないのでしょうか。

私は食道ガンで、平成14年9月食道の全摘出手術を受け、三カ月間の入院生活を余儀なくされました。翌年5月、剣道・居合道を再開し、ある大学の剣道部の指導稽古に赴いた時のことです。術後まだ日も浅く、無理のないように注意しながら、学生諸君と竹刀を交えておりました。最初のころは気が付かなかったのですが、小手や面は盛んに打って来るのですが、胴だけは一向に打って来ません。ハッと気が付きました。そうか、彼等は私の身体を慮って右胴を打たないのかと悟りました。稽古終了後、監督に尋ねると彼は「いや、私は学生達に、あの人は大手術を受け、それに負けることなく、気力で剣道に復帰したのだ」としか言わなかったと語りました。私は学生達の相手に対する思いやりの精神に強く心を打たれました。剣道を指導するどころか、逆に彼等から武士道精神の根幹を学んだのであります。この若者達がある限り、日本の将来は安泰であり、絶対に大丈夫であると確信するに至りました。

前述の女子高生も将来は結婚し、家庭に入り子供を産み、母親となるでしょうが、一体どのように子供に躰をし、教育するのでしょうか。暗澹たる気持ちにならざるを得ません。

当協会常務理事の提言にある「学校教育に、道徳の授業を復活させる」は蓋し正鵠を射たものであると思います。徳育の教育なかりせば、道徳の向上などあり得ません。

われら武士道協会の会員一同、こぞって応援するものであります。

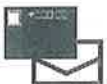


活人剣への目覚めを

会員 桑原 啓善

日本は世界でも一國一文明の特異のサムライの国であると指摘されています。日本精神文化のエキスが武士道です。武の真実は殺人剣ではなく、一殺百生・破邪顕正の活人剣です。今、世界は西欧近代文化のグローバル化により、地球環境破壊と金融破壊(生活破壊)の危機にあります。現在これを救う手立ては不明です。今こそ武士道協会が声を大にして立つべき時に来ています。日本は敗戦で、日本の歴史と日本の文化を喪失しています。武士道は進化すべきもの、敗戦を梃子に今こそ活人剣を振るう日本に目覚めましょう。

〔「義経と静の会」会長。(株)リラ自然音楽研究所会長 逗子市在住。八八歳〕



困難こそ、武士道

会員 橋本 裕一

私は、約六年間心の病と闘っている。病名は、パニック障害である。パニック障害というのは、激しい動悸、めまい、強度の緊張、息苦しいなどの症状がある。今も薬を服用している。

現在、私は広島県の大崎上島という島で静養している。当初は、静養の目的だったが、島の自然に魅了されて好んで滞在している。瀬戸内の海は穏やかで、山があり、畑があり、緑がたっぷりの環境。夜は、空一面に星達のパレード。海は、月光でキラキラ輝き、ロマンの島と言いたい。島での生活は、地域コミュニティーを目標に島の詩人として活動をしている。島の人間関係は、濃密である。日本の古き教えの「助け合い」がある。私は、島の方々に支えられている。日々感謝。名誉、名声、地位、お金は、平等ではないが、命、魂、心は、みんな持っている。これらが満たされていれば、病気と闘う「生きる」気持ちが芽生える。心の病は、けっして心が満たされていないからではなく、誰にだって病気になる可能性はある。私が武士道協会に入会したのは、島の生活の影響もある。私は、心の病だが、すごく幸せ。家族、友人、知人の理解を感じて、困難を困難に思えない。過去に自殺未遂四回を経験したが、死を見つめ、生を悟る。その中に武士道があると確信した。

〔「ヒナク文学」他を上梓。広島県大崎上島在住。http://www.hyuga-yuichi.com〕

【投稿募集】 あなたの武士道に関するご意見を事務局までお寄せください。

- 字数：250字程度 ● 住所・氏名(ふりがな)・年齢・職業・電話番号を明記(匿名希望の場合は、その旨も明記)
- あて先 〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11 PHP研究所内 武士道協会事務局 読者投稿係
- FAX、電子メールでの応募も受け付けます。なお、原稿は返却できません。また、内容を損なわない範囲で修正させていただきます。ご了承ください。

※個人情報厳重に管理し、必要に応じた利用以外には使用いたしません。

●活動報告

李元台湾総統をお招きし、「新日本創生フォーラム」を開催

9月5日、東京日比谷公会堂で、武道協会と東京青年会議所の共催で、台湾の李登輝元総統をお迎えし、新日本創生フォーラムが開催されました。講演会では、約1,500名の方が熱心に李元総統のお話に耳を傾けておられました。

李元総統は日本が国際社会から一層の尊敬を受けるよう期待すると述べられ、今こそ、明治維新と並びうる平成維新をおこなうべき時として幕末の志士、坂本龍馬が近代化策を構想した「船中八策」を日本の現状に当てはめて分析、今後の日本の外交、政治改革の課題をわかりやすく指摘されました。最後には、会場総立ちでスタンディングオベーションの中、降壇されました。

新日本創生フォーラム 李登輝氏 歓迎レセプション



【歓迎レセプション】 李登輝ご夫妻を囲んで

講演の後、会場を変え、50名近くの有志が集まり、李元総統歓迎レセプションが行われました。武道協会からも、塩川理事、江口副理事長、渡部副理事長、津田常務理事、本多常務理事、田中理事を始め、会員有志が参加されました。李元総統は、お疲れだったと思うのですが、終始、笑みを絶やさず、やさしく和やかなご表情で、次から次にお席にこられるお一人おひとりにも、ご夫妻で丁寧にお話をされるお姿は、非常に感動的で、素晴らしい一日を過ごさせて頂きました。

船中八策（原文）

坂本龍馬

- 一策 天下ノ政權ヲ朝廷ニ奉還セシメ、政令宜シク朝廷ヨリ出ツベキ事
- 二策 上下議政局ヲ設ク、議員ヲ置キテ万機ヲ參贊セシメ、万機宜シク公議ニ決スベキ事
- 三策 有材ノ公卿諸侯及天下ノ人材ヲ顧問ニ備ヘ、官爵ヲ賜ヒ、宜シク從來有名無実ノ官ヲ除クベキ事
- 四策 外国ノ交際廣ク公議ヲ採リ、新ニ至當ノ規約ヲ立ツベキ事
- 五策 古來ノ律令ヲ折衷シ、新ニ無窮ノ大典ヲ撰定スベキ事
- 六策 海軍宜シク擴張スベキ事
- 七策 御親兵ヲ置キ、帝都ヲ守護セシムベキ事
- 八策 金銀物貨宜シク外国ト平均ノ法ヲ設クベキ事



特別企画 「坐禅研修と和食マナー講座」 天龍寺にて開催

平成21年11月1日

各地の会員の皆様から様々なご要望ご意見が寄せられてまいります。“研修を通じて会員相互の懇親を”“老若男女の参加できるもの”“費用をリーズナブルに”等々、色んな声を頂戴しております。その中に“日常生活の基本作法を学びたい”との声寄せられ、今般の「坐禅を学び、精進料理を食し、和食の作法を学んでいただく」特別企画の実施となったものです。

京都嵐山の名刹大本山天龍寺で、法話を聴き、坐禅を体験し、研鑽を深め、精進料理を頂戴し、和食のマナー、和室での作法など素養に磨きをかけるという内容を盛り込みました。

当日は、坐禅研修所「友雲庵」において、天龍寺法務部長小川漱生師の法話から始まりました。和尚様の熱気ほとばしる、厳しい中にも楽しいお話は参加者の心底に深く届きます。正座で何う中、足のシビレは限界に達しています。約一時間の法話が終わり、次は坐禅の姿勢、作法のご説明を伺いました。いよいよ静謐な禅堂での坐禅修行です。禅堂の壁を背にして坐禅を組んだ参加者は、次々と、自ら合掌し前屈みになって和尚様の警策を、肩背中にいただきました。

一連の坐禅体験は、身の引き締まる思いのうちに、和尚様から大きなエネルギーを頂戴したのか、心身共に清々しく洗われた感で一杯になりました。

坐禅のあとは、友雲庵の特別室にて、天龍寺「節月」の精進料理が待っていました。ここでは、和食のマナーについて、当協会理事の川路妙先生のご指導ご講義を得ました。箸の上げ下げ、お料理の食し方、作法振舞い等々、目から鱗の連続です。先生には参加者の疑問質問にも丁寧に答えていただき、一汁五菜の精進料理を食し、楽しいひとときを過ごしました。

修了時には、坐禅体験証を頂戴し、禅堂の前で小川和尚様を囲んで記念撮影をさせていただきました。和尚様からは、特別にもう一度お話をいただき、時間の経つのを忘れてしまいました。

こうして無事研修を終えることができましたのも、これ偏に臨済宗大本山天龍寺様のご指導ご協力の賜物と、一同大感激しております。誌上より、厚く御礼を申し上げます。

解散のあとは、三々五々、天龍寺の諸堂、庭園拝観、嵐山散策に向かいました。参加者相互の親睦も図ることができ、有意義な研修となりました。



定期講座

武士道

平成21年度(計5回)定期講座が終了しました

	講師	テーマ	東京会場	京都会場
第1回	矢作幸雄理事	いまなぜ武士道が必要なのか	5月9日(土)	5月10日(日)
第2回	安岡正泰理事	武士道つれづれ	6月6日(土)	6月7日(日)
第3回	田中成明理事	仏教と武士道 一武蔵を通じて一	7月4日(土)	7月5日(日)
第4回	小野晋也専務理事	現代社会の諸問題と武士道、 そして在野の精神	8月1日(土)	8月2日(日)
第5回	本多百代常務理事	日本の心・武士道	9月12日(土)	9月13日(日)

5カ月にわたる定期講座を終えることができました。東京・京都会場共毎回熱心な受講者を迎えることができました。各講座の講義が終わるたびに、講師を囲み質疑応答がなされます。予定の時間を越えることも多く、講師の先生は嬉しい悲鳴をあげていました。会員間にも、共通意識が芽生え、随所で親睦がはかられていたようです。

●本講座は協会認定講座とさせていただきます、5回ともご出席された30名の方が特別協賛委員として申請いただきました。



平成22年度 1~5月までの予定

※詳しくは、別途案内およびホームページでお知らせします

定期講座

	講師	テーマ	東京会場	京都会場
第1回	矢作幸雄理事	やさしく学ぶ:祝詞の教え	3月27日(土)	3月28日(土)
第2回	安岡正泰理事	やさしく学ぶ:論語の教え	4月17日(土)	4月18日(土)
第3回	田中成明理事	やさしく学ぶ:お経の教え	5月15日(土)	5月16日(日)

講演会・セミナー

		講師	月日	会場
武士道協会2周年記念講演会		渡部・安岡・矢作ほか(予定)	2月7日(日)	東京
人間力向上セミナー 【京都】	第11回	本多常務理事	1月23日(土)	京都
	第12回	本多常務理事	2月20日(土)	京都
	第13回	本多常務理事	3月13日(土)	京都

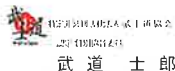
特賛委員制度

上記定期講座は、武士道協会認定『特別協賛委員制度』に準拠した講座となっておりますので、出席またはDVD講座の受講終了者で、所定の手続き(申請、小論文提出)を経られた方は、理事会審査の承認を得られますと、武士道協会認定『特別協賛委員(特賛委員)』を称することができます。

特賛委員となられた方には、認定証と協会ロゴ入り名刺の台紙を送付し、当協会ホームページ「特賛委員一覧」にて公表させていただきます。

(名刺を当協会で作成の場合は、有料となります。)

新たに、認定を希望される方は、今後実施します認定講座を5回受講(上記定期講座のDVDをご視聴いただき、感想文を提出いただくことでも可能)で、申請していただくことができます。



〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11 PHP研究所内
TEL(075)681-5514 FAX(075)682-3565
URL: http://www.bushido.or.jp/ E-mail: info@bushido.or.jp

編集後記

この第四号は、会員様のご意見を多数掲載させていただきました、会報誌に一歩近づけたのではないかと思います。ぜひ皆様方の多くのご意見をお聞かせいただき、より充実した会報誌にしていきたいと思いますので、多くの方のご投稿をお待ちいたしております。

芸能界を中心に薬物乱用のニュースが毎日のように耳に入ってきます。少し前までは、大変なこととして聞いていたものが、今では、またかということでも軽く受け取っている自分が恐ろしくなります。悪事が、じわじわ時間をかけて浸透し、当たり前になっているのが、今の日本の荒廃につながっているのでは。一人ひとりが、責任を取る、相手を思いやる...そういったことが、当たり前になる日本を、今こそ、目指してまいらねばならないのではないのでしょうか。

武士道協会の使命の大きさを感ずる今日この頃です。

武士道協会事務局

〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11 PHP研究所内
TEL(075)681-5514 FAX(075)682-3565
URL: http://www.bushido.or.jp/ E-mail: info@bushido.or.jp

特定非営利活動法人 武士道協会

- 武士道第4号
- 平成21年12月発行